

「何人ですか？」
そう聞かれたのは、異国の雰囲気漂う、彫りの深い顔をした女性。「それくる？ ぱっと答えられへん」。女性は滑らかな関西弁で答えた。

昨年3月に制作された、両親や祖父のどちらかが外国人という若者7人にインタビューしたドキュメンタリーDVD「ナニジン？」の一場面だ。

企画を中心になって進めたのが、黒島・トーマス・友基(27)。「英語で話しかけられたり生い立ちを聞かれたりし続けると、日本人と知っているのに、自分が何者かわからなくなるんです」。答えに窮する彼、彼女の気持ちをこんな言葉で代弁した。

黒島の祖父は、大阪の進駐軍基地の料理人で、米国人。祖母は日本人。父は

疎外に悩む仲間支援

の祖父の間に生まれ、日本人の母と結婚した。黒島は大阪生まれの大阪育ち。話すのは日本語だけだ。それでも、日本人とみてもらえない疎外感を抱えて生きてきた。「僕もそうだったんだよ」と仲間たち

「ルーツ」を意識し始め

たのは中学に入った頃だ。身長170センチ超。足は30センチ。シャツの下には黒々とした胸毛。「違い」を初めて感じた。水泳の授業は見学し、修学旅行でも風呂は隠れるように最後に入った。

と願い、軍歌のCDを借りては聴く毎日。でも、高校進学直後、同級生から次々と「日本人なの？」と質問攻めにされた。嫌気がさして、不登校になった時期もあった。

がらに話した。それでも、名前やルーツを隠さず生きている。そんな同世代の姿に、黒島は「逃げたらあかん」と気づかされた。

「ルーツ」を意味し始め

転機は高校3年の春。国際結婚で生まれたり外国籍を持つたりする各地の高校生ら約100人が集まって悩みを語り合う交流会の実行委員に選ばれた。

よく相談に乗ってくれた教師が交流会を知り、声をかけてくれたから引き受けた。でも、「外国嫌い」の黒島はひそかに、「外国人はみんな言い負かしてやろう」とたくらんでいた。

①サークル仲間と制作中のドキュメンタリーについて話し合う黒島(右から2人目)(大阪府豊中市で) ②大久保忠司撮影の黒島の祖父母。祖父(左)は米国人、祖母は日本人だ(1940年代後半、大阪府内で撮影)



滋賀県での事前合宿で実行委員約10人が初めて顔を合わせた。みんなが、名前や見た目の違いなどで受けたいじめや差別体験を涙ながらに話した。

島は郵便局に就職した。大阪府千早赤阪村を配達のバイクで回る毎日を送りつつ、11年には「アイデンティティーに悩む仲間の居場所作りをしたい」と、知人らとサークルを結成した。交流会や映画上映会などを催し、いま、米国人との間に生まれた子供が多い沖縄を舞台にしたドキュメンタリーの制作を進める。



国際結婚 比率は…?

国際結婚した両親から生まれた歌手や芸能人をテレビで見ない日はない。「元々の国際化は確実に進んでいる」。交流に取り組む神戸市のNGO「ミックスルーツ・ジャパン」代表、須本エドワードさん(32)はそう指摘する。

厚生労働省によると、2012年に結婚したカップルの28組に1組は、どちらかが外国人で、その比率は1970年の約7倍になった。12年に生まれた子供の2%にあたる約2万人は、両親のどちらかが外国人で、その数は87年から倍増している。

父がベネズエラ人、母が日本人の須本さんは「生い立ちで悩む当事者も、両親とも日本人の人もお互いを知ることが大切。個人を知れば不毛な誤解や摩擦も避けられる」と交流を勧める。

「生まれがどうあつても、人として尊重されるのは当たり前。そんな社会にしたい」。自分たちの存在が自然に、そして普通に受け止められる日まで。(敬称略)